＜資料＞

教育実習が学生にもたらす学修効果と教職課程
―実習の内容と学修効果から教職課程入門・教職課程の指導を考える―

白石　　淳*

抄　録：教職課程の教育実習において、学生は教職や生徒に係わる内容を広く深く学修する。この学修を学生の視点で振り返ることにより、学修の内容や効果、困難だった点等をリアルに表わせ、それに検討を加えることで教育実習、教職課程の質の向上に資することができるのではないかと考えた。教育実習は、学校教育に関して総合的に学ぶ内容であるが、実習校により実習時期、期間、内容などが異なっている。内容は授業実習が中心となっており、総合的な学習の時間、学校行事、クラブ活動に取り組む学生は少ない。しかしこれらについても、学校の教育活動であるので、実習として取り組む機会を設けるなど、教職コアカリキュラムの内容を充分満たすようにする必要がある。実習の結果、学生は、生徒に対して授業を行う難しさを改めて認識している。また、教師と生徒との人間関係の交わりにおいて生徒が成長することを理解する機会ともなっている。これらの生徒との係わりのなかから、学生は「教職という仕事」の素晴らしさや喜びを体得し、教職への意欲を高めている。
この教育実習の学修を、教職の入門的な初年時の授業科目に結びつけ活かすことができる。実習の困難に対する学び、実習の成果から初年時に学ぶべき内容を考えたところ、教職課程の目指すモデルとしての教師像や教職課程の到達目標の設定、また教育課程の改善策の検討などに有効に働く可能性がある。教育実習の学修を見通して、教職課程全体の学修内容を再検討し、効果的な学修プログラムを構築することが必要である。

キーワード：教育実習、学修効果、教職課程、教師の資質能力

1．はじめに

教職課程においては平成31年度からコアカリキュラムが導入され、全体目標、一般目標、到達目標が示される。これに沿って授業のシラバスに、具体的な授業の目標・内容・評価等が記され、授業が展開されることになる。

教育実習の目標は、「大学で学んだ教育に関する理論を生かしつつ、職務に支障を起こさない範囲内で、学級担任や教科担任、教科指導や生徒指導に真摯に取り組みながら、教師として必要な実践的指導力の基礎を体験的・経験的に学ぶ」[1]であり、その内容は「学校経営、学級経営、教職員（身分と服務など）」「指導計画（カリキュラムの運営管理など）」「学習指導」「生活指導」「諸表簿の取扱い」[2]である。

コアカリキュラム、シラバスの記載内容を学修することになるが、実際に学生はどのような内容の実習を行い、どのようなことを身に付けているのであろうか。またどのような困難に直面しているのであろうか。「先生の仕事について考えた。生徒のことを一生懸命考え、授業をされている」「教師とは授業だけではなく、さまざまな面で動く」「先生は、教科に対する専門性がとても高い」「生徒は、自分が高校生の時より幼いような気がした」など、学生は多くのことを実習から学んでいる。このことから、教職や生徒に関する内容を広く、深く学修していることを伺うことができる。そこで教育実習の内容を当事者である学生の視点で示すことにより、教育実習の実態を表すとともに学生が捉える教師として必要な能力を明らかにすることができ、教育実習のみならず教職課程全体の改善等を図る際に有益となると考える。

本稿では、学生の視点で高校公民・福祉の免許状取得

＊臨床福祉学科 社会福祉学講座

のための教育実習の学修内容を振り返ることにより、形式・内容的にもほぼ定型化していると考えられがちである教育実習の学修内容や学修効果、困難だった点等を示し、教育実習、教職課程の質の向上について検討を加えることとする。

2．教育実習の位置づけ

（1）コアカリキュラムの内容

平成31年度から導入される、教育実習のコアカリキュラムについて示す[3)]。全体目標は、「教育実習は、観察・参加・実習という方法で教育実践に関わることを通して、教育者としての愛情と使命感を深め、将来教員になるうえでの能力や適性を考えるとともに課題を自覚する機会である。一定の実践的指導力を有する指導教員のもとで体験を積み、学校教育の実際を体験的・総合的に理解し、教育実践ならびに教育実践研究の基礎的な能力と態度を身に付ける。」と示されている。一般目標及び到達目標は、「事前指導・事後指導に関する事項」「観察及び参加並びに教育実習校の理解に関する事項」「学習指導及び学級経営に関する事項」に分けられている。「観察及び参加並びに教育実習校の理解に関する事項」の一般目標と到達目標は次のとおりである。

（一般目標）

幼児、児童および生徒や学習環境等に対して適切な観察を行うとともに、学校実務に対する補助的な役割を担うことを通して、教育実習校（園）の幼児、児童又は生徒の実態と、これを踏まえた学校経営及び教育活動の特色を理解する。

（到達目標）

1）幼児、児童又は生徒との関わりを通して、その実態や課題を把握することができる。

2）指導教員等の実施する授業を視点を持って観察し、事実に即して記録することができる。

3）教育実習校（園）の学校経営方針及び特色ある教育活動並びにそれらを実施するための組織体制について理解している。

4）学級担任や教科担任等の補助的な役割を担うことができる。

「学習指導及び学級経営に関する事項（小学校教諭・中学校教諭・高等学校教諭）」の一般目標と到達目標は次のとおりである。

（一般目標）

大学で学んだ教科や教職に関する専門的な知識・理論・技術等を、各教科や教科外活動の指導場面で実践するための基礎を修得する。

（到達目標）

1）学習指導要領及び児童又は生徒の実態等を踏まえた適切な学習指導案を作成し、授業を実践することができる。

2）学習指導に必要な基礎的技術（話法・板書・学習形態・授業展開・環境構成など）を実地に即して身に付けるとともに、適切な場面で情報機器を活用することができる。

3）学級担任の役割と職務内容を実地に即して理解している。

4）教科指導以外の様々な活動の場面で適切に児童又は生徒と関わることができる。

と定められている。

（2）シラバスの内容と評価

シラバスに記載の学習目標は、4点あげられている[4)]。「1．生徒の実態と、これを踏まえた学校経営（経営方針）・教育活動の特色（含む組織体制）を理解できる」「2．生徒の価値観形成を育む教科指導の具体的な展開方法及びホームルームの運営方法等を習得できる」「3．授業、ホームルーム、学校行事、部活動等の特別活動、総合的な学習の時間の実践を通して、教師に必要な知識・技能が高まる」「4．教員の職責を理解し、教職に対する自覚が持てるようになる」である。

具体的な学修内容は、「第1週目」には、「学校運営と運営のきまりなどについての理解を深める」「教員の職務内容についての理解を深める」「生徒の学習の様子などについて観察をとおして理解する」「教員の授業の方法などについて観察をとおして理解する」「教材研究・学習指導案の作成を行い、授業の準備が整える」であり、実習校・生徒の理解、教員の職責について学ぶとしている。「第2週目」には、授業観察よりも授業実習が中心となり、「教材研究・学習指導案の作成を行い、授業の準備を進める」「教科の指導方法の習得、生徒の理解、教員の職責の理解を深める」「特別活動、総合的な学習の時間の観察・参加・実習を行い、その展開方法を習得する」「生徒指導を行い、生徒の理解、その指導方法を習得する」など、教材研究や授業展開のみならず、ホームルーム活動、クラブ活動、行事に係る特別活動の指導、総合的な学習の時間の指導、生徒指導について学ぶことになる。

実習で期待される学修内容は、実習評価票の評価観点においてもみられる[5)]

項目：学習指導

○教材研究：教材・教具の準備、実験・実習の準備、指導案の作成

○指導方法：動機づけ、授業の展開、教材・教具の使用、実験・実習の指導、板書、発問、言語・音声

項目：生活指導
〇生徒理解：生徒との接触、給食の指導、清掃の指導、学校行事への参加、クラブ・部活動への参加
〇学級指導：生徒の掌握、生徒の指導、学級・ＨＲ活動の指導
項目：実習態度
〇勤務態度：実習への意欲、出勤状況、マナー、教員と協力、教師としての自覚
〇実務能力：学級経営の事務処理、実習日誌等の書類の提出

コアカリキュラムの目標、シラバスの目標、評価票の共通する項目をみると、学校の組織運営、生徒の理解、教師の責務、教育活動全体、授業実践が重んじられている。

３．学修の内容と効果

教育実習を行った学生は、次のように述べている。「教員としての仕事のイメージが付いた。先生はメチャクチャ仕事がある。生徒との関わり方も先生によりさまざまで、自分の性格に合わせるようにしていた。態度や話し方なども、先生によって異なることを知った。先生の顔によって異なる。生き生きしている先生など、取り組み方によって異なる」と、教師の仕事や態度から多くのことを学んでいる。授業については、「授業の方法、アクティブラーニングの取り入れ方などもっと勉強しなければならないことや教科の知識を深めなければならないことを感じた。自分の知識の伝え方も学びたい」「授業の導入の大切さを知った」等を学んでいる。では実際に実習の内容、学修効果はどのようなことであったのであろうか。本稿では、教育実習終了後に実施した学生への調査をもとに学修の内容、効果、困難な点を示すこととする[6)]。

（１）実習の時期と日数

実習時期は、最も多いのが６月の実施で53.2％、次いで５月が31.2％であり、84.5％の学生が春季期間に実習を行っている。次いで秋季期間の10月が10.4％、11月が2.6％であり、８月と９月はそれぞれ1.3％であった。平成29年度より、特別支援学校教育実習の日程の関係上から夏休み前の実習を中心としているが、学校側の行事・授業の予定等から実習期間は５月～６月に集中している。

実習期間は単位数上２週間を標準と定めている。実質の実習日数（実習校における事前オリエンテーション等の時間を除く）は、10日間の74.0％が最も多い。次いで９日間の7.8％、11日間と15日間がそれぞれ5.2％、12日間と14日間が2.6％、16日間と17日間が1.3％であり、10日間という期間が中心となっている。

（２）担任する学級と教科

実習として担任する学級は、学年で最も多いのは２学年の42.9％、次いで１学年の35.1％、３学年の22.1％であった。春季期の実習が多いことから、入学後間もない１学年、進学・就職を控える３学年よりも、学校生活に慣れている２学年の学級を担任することが多い。担任する教科は、公民・福祉の免許課程であるところから、公民が中心である。89.6％の学生が公民で行っており、福祉は１人である。他免許教科で行った者は、高校の「日本史（１人）」「世界史（２人）」、高校の通信制課程の「国語、数学、公民」、中学校の「社会」（３人）である。公民の科目としては、「現代社会」が39.1％、「政治経済」が30.4％、「倫理」が23.2％である。「政治経済･倫理（１人）」「現代社会・政治経済（３人）」と２科目の担任は４人であり、多くの者が１教科１科目の担任となっている。

（３）実習の内容と効果

①実習の内容

授業実習として授業を担任した時間数は、１時間から24時間と開きがあるが、多くの学生が４～12時間の授業実習を行っている。最も多いのは、９時間の21.3％（16人）である。次いで６時間の12.0％（９人）、８時間の10.7％（８人）、４時間と12時間の9.3％（７人）が続く。11時間以上行った学生は23人（30.7％）いる反面、１時間が１人、３時間は２人と少ない実習時間に留まっていることもある。平均は9.75時間である。

実習における担任は、教科と学級を担うので、学級担任の実習としてSHRを担当するが、LHRの実習を行った学生は全体の58.5％である。LHRの実習時間数は１時間が最も多く33.8％、２時間が19.5％である。実習期間が２～３週間であるところから、この時間数になる。実習を行わなかった学生は41.6％おり、参加または参観にとどまっている。総合的な学習の時間の実習については、74.0％が担当していない。実習を行った学生は１時間が11.7％、２時間が7.8％である。総合的な学習の時間の実習は、LHR実習よりも行う学生が少ない。LHRや総合的な学習の時間は、週あたりの単位数が少ないので、実習校の年間予定の関係上、また内容の継続性などからか、実際に実習を行わず、参加・参観にとどまることも多いのではないか。

特別活動の部活動を担当した学生は、33.8％にとどまる。担当した部活動は多岐にわたり、体育系では硬式テニス部、バレーボール部、女子ホッケー部、バトミントン部、軟式野球部、剣道部、卓球部、サッカー部など、文化系では器楽部、吹奏楽部、放送局､YMCA部であり、体育系部活動を担当した学生が多い。部活動の担当の有

無は学生に任される傾向があり、高校生時代の所属部活動、部活顧問との関係性から実習を行うことになるのではなかろうか。

次に実習中に実施された学校行事について示す。行事の実施は実習期間によるところが大きいが、49.4％の学生が次のような行事の実習を行っている。体育祭・スポーツディ･スポーツ大会、健康診断、遠足、芸術鑑賞、野球部全校応援、交通安全講話、高体連壮行会、自転車点検、学校説明会、避難訓練、進路相談会、模擬テスト･漢字コンクール、校内弁論大会、儀式的行事の始業式、外清掃、生徒会活動の生徒総会である。実習生が高校に来ているところから、「卒業生の話を聞く会・進路講演会」などを開催する学校もあり、多様な行事を実習として取り組むこともあるが、実際に担当した学生は半数以下にとどまる。

このように授業実習については、時間数も多く担当しているが、特別活動や総合的な学習の時間については、実習時期・期間にも左右される。実習を行った学生は少ないが、教育活動上重要な内容であるので、実習としての対応も必要であると考える。

②実習の効果

実習の成果については、「実習の有意義度」「実習校の指導・内容」「生徒との交流」「教職の理解」「教職への志望」の有無、理解・深まり・高まり度に関する学生の自己評価を次に示す。いずれの項目とも肯定的に捉えられており、とくに実習の意義については高く評価している。一方、「生徒との交流が少なかった」「教職への志望が高まらなかった」「実習校の指導･内容が少なかった」と意識している学生もいる。これらの否定的な項目は、大学においても学生に指導助言を行っているが、実習校の実習計画・指導教員の指導観などに左右されることも大きいと思われる。

表-1　実習の効果

項　目			
実習の意義	大変有意義 80.5％	有　意　義 19.5％	あ　ま　り 0.0％
実習校の指導・内容	大変良かった 83.1％	良 か っ た 10.4％	少なかった 5.7％
生徒との交流	大変深まった 44.2％	深 ま っ た 48.1％	少なかった 7.8％
教職の理解	大変理解できた 55.8％	理解できた 44.2％	充分出来なかった 0.0％
教職への志望	大変高まった 48.1％	高 ま っ た 45.5％	あまり高まらなかった 6.8％

実習の学修効果を整理し具体的に示すと、次のように多様である。授業の方法など授業に関する内容が多いが、とくに生徒に伝えるという難しさを学んでいる。

【伝える方法】

○教えることの難しさ
○教科書の文字をそのまま言うのではなく、自分自身の言葉で伝える必要があることを学んだ
○相手に伝わるか、言葉や方法を工夫することで人への伝え方を学んだ
○人に勉強や知識を教えるという難しさ
○生徒にどのように伝えるか、生徒との距離感等を学んだ
○知っていることと教えることとの違い
○クラスによって授業の様子をかえなければいけない。クラスによって雰囲気が全然違う
○伝えることの難しさ。生徒にとって「わかること」とは何か
○「教える」と「伝える」の違いの理解と、生徒主体の本当の意味での理解

【教える技術】

○教材の指導法。板書の方法、授業展開など
○授業の展開と雑談の大切さ
○導入での生徒の興味・関心・意欲の引き出し方
○授業の展開方法。いかに生徒を主体的にした授業ができるか
○授業をおこなうときに大切なことは、生徒をいかに活動させるかであること
○授業中の発問の大切さなど授業をする技術

【教えるために必要なこと】

○教えるためには多くの知識が必要ということを身をもって経験することができた
○指導案の書き方、授業の進め方、生徒の気持ちになって授業を組み立てること
○教材研究をしっかりしないと授業はできない
○生徒の実態を把握したうえで、授業展開の工夫等を考えなければならないこと
○社会科と日常生活と関連させながら教える必要があること
○授業は進めることではなく、生徒に対していかにわかりやすく教えられるかということ

「生徒の視点と教師の視点では、勉強の仕方がまったく違う。生徒の時は教科書の太文字を覚えればよかった。教師は生徒にどうやって授業に参加させ、興味を持たせ『覚えよう』『勉強しよう』と思わせるかという視点が必要である」など、伝えるという難しさ、教える技

術、教えるために必要なこと、また生徒の前で実際に授業をすることの難しさやその準備の必要性、その基盤である専門知識の重要性について学んでいる。

実習では教師に対する見方や職務について学んでいる。大学の授業においても学ぶが、教師の職を実際に体験することにより、その職務の内容、重要性などを体験している。

【教師に対する見方、教師の職務】

○生徒の視点と教師の視点では、勉強の仕方がまったく違う
○学校の先生は常に勉強をしており、向上心が高かった
○教師の求められる要素等を学ぶことができた
○教師の大変さ。第一は授業であるが、分掌業務をそれぞれの先生方は抱えておりきつい仕事だと感じた
○教師としての姿勢や態度、役割
○教職という仕事の素晴らしさ
○実習前は「教師＝授業」というイメージがあった。確かに教師は第一に授業を通して信頼関係を築くと思うが、単に授業内容で知識を与えるだけでなく、それ以外での関わりでも生徒に真正面から向き合い、どのような時も「生徒のために」全力で働くことが必要な、魅力ある職業であることを学んだ
○自分の抱いていた教師像が良くも悪くも180度変わる
○先生のすごさ、人の暖かさ、母校(先生、生徒)の素晴らしさを改めて感じた
○先生という職に対する難しさ、やりがいなど教職の理解が深まった
○高校の時には気づかなかった先生方の忙しさとかすごさ

【コミュニケーション力、生徒との接し方】

○生徒とのコミュニケーションの大切さ
○生徒との関わり方、コミュニケーションが大事である。生徒への係り方
○教師として生徒との接し方

教師の職の内容、その実際を学ぶとともに、生徒との係わり方、コミュニケーションの重要性について学修している。他に「社会人としてのマナー」「生徒にとって何が一番良いことなのか、一緒に悩み考えること。生徒と一緒に成長すること」を学んでいる。

③生徒の姿から学んだ内容

教育実習では、生徒と接して学ぶことは大きい。授業に関すること以外で、生徒の姿から学んだ内容について示す。

生徒自身については、「昔より、シャイな生徒が多い」「自分の時よりも幼いような気がした」「おとなしい。自分の高校生時代の雰囲気よりも真面目」「活発な生徒と、おとなしい生徒の二極化」「大人びたりひねくれていたりしていない」など、自分が高校生の頃と比較しながら、今日の生徒の姿を捉えている。生徒の態度についても、「先生に対して素直で、勉強に対し積極的」「きちんと挨拶ができる」「しっかりとしている」など、肯定的である。このように生徒の実態を把握しているが、「自分たちの時代で通じる話題が生徒達には通じなかった」「私達の時代とは変わっていて、ついていくのが大変だった」「生徒との共通の話題が難しい」など、生徒と接する際に戸惑う面もある。生徒指導の面においては、「先生と生徒の立場を理解しておらず、先生と友達感覚で接してくる生徒が多い」「距離感が近い」などのように教師に接する生徒も多いが、「言葉には出さないが、何か心に秘めて、何かを伝えたいと考えている生徒が多い」「人をよく見ている」「静かないじめがある」という内面的な問題を抱える生徒もいるとしている。生徒の態度や会話等から、生徒の実態、理解、心理などを幅広く学んでいる。

④教師の姿から学んだ内容

実習では、直接指導を受ける教師や他の教師の指導の様子や姿・態度からさまざまなことを学修している。教師の全体的な印象としては、「親切な先生ばかりだった」「やさしい先生が多い」としている。生徒に向かう姿勢については、「生徒のことを一生懸命に考えて、授業をされている」「生徒への熱意と体力がある」「どの先生も生徒への接し方がとても親身で愛情が感じられた」「生徒のことをよくみている。そして理解している」「生徒想いで熱心な先生が多い」と、生徒のことを中心に考えていると評価しているが、「生徒への接し方で温度差がある」「自分の身のことを考える人と、生徒のことを考える人に分かれていた」と批判的な捉えもあり、学生は生徒に対する教師のあり方について多面的に学んでいる。

教科・授業に関しては、「教科の専門知識が高い」「教科の指導力が高い」「教え方のプロだと思った」「先生でも教え方、考え方に差がある」と、専門教科の有する知識の豊かさ、指導力の高さを確認し、その必要性を感じている。

教師の仕事に関して注目した学びもある。「生徒だったときに気づけなかった先生方の仕事の場面を見ることができた」「授業、生徒・親、地域、部活や雑務など、とにかくやらなければならないことの量が多く、とても多忙」「生徒の立場の時には感じていなかったが、見えないところで、さまざまな業務を行っていて大変だと思った」と、教職を捉えている。教師自身については、

「本当にいろいろな先生がいる」「やる気がある先生とやる気がない先生が明確。先生方との関係性など」などがある。

実習においては、同僚教師としての視点で教師を捉えることができ、自己の教師観、教師モデルを形成する機会となる。また、教師の姿を自己の教師観から評価し、自己の不足する知識技術を再構成する機会として働いている。

（4）実習中における困難

次に教育実習中に感じた困難なことについて示す。困難（困った）と認識した最も件数が多かったのが、「教材研究に関すること」である。前述したように教材研究・教科内容の難しさがあげられていたが、「教材研究が難しい・大変」「教材研究の時間が足りない、教材研究不足」などである（24件）。教材研究に関連しては、「担当する単元が実習直前までわからず準備ができなかった」「授業実習の回数が多かったので、準備をしっかりとすべきであった」（4件）などがあげられている。学校現場における実際の時間・場所のなかで教材研究を進めることは学生にとって難しいものとなる。

教材研究と不可分の「教科の内容に関すること」に困難感を抱いている学生も存在する。「教科の内容の理解ができておらず毎日勉強」「教科書の内容の把握」「教科の内容」（4件）「勉強不足」（3件）などである。その結果、「生徒の質問でわかないことがあったので困った」「適切に答えることができなかった」「生徒から質問がたくさん来るので深めておけばよかった」（3件）となることもある。

「授業の展開・指導案の作成に関すること」については、「指導案の作成（時間がかかる、授業の構成などが上手くできなかった）」が5件、「授業の進め方・思うように進まない」4件、「授業の展開方法」「展開方法が思いつかない」「学級により雰囲気が異なるので、進行の仕方」などがあげられている。授業の技術については、「発問の方法（生徒が答えてくれない）」「黒板に書く文字（綺麗に書けない）」があった。他には、「対生徒に関すること」については、「生徒とのコミュニケーションの取り方」（2件）、「生徒との共通の話題が難しい」「生徒との距離感の取り方」がある。また、「指導教員に関すること」は、「指導の先生は指導をあまりしてくれない」「指導がざっくりしたものだった」「先生により指導内容が異なる」「先生ごとに違う方針であった」である。「ＨＲに関すること」は、「SHRの展開方法」「LHRの連絡の際に聞いてくれなくザワザワした」であった。

このように、授業関係、とくに教材研究、その基盤となる教科内容が多く、教科内容の理解不足、教科書以上の知識の習得が必要であることを示している。

（5）実習における喜び

実習中の学修は、学生の喜びにも繋がる。また喜びは、実習中の困難なことを乗り越える前向きな力となり、実習終了後に教師の職へ繋がったりする力ともなりうる。

○生徒が授業後に私のところまで来て、会話したこと
○多くの生徒と関わることができた
○生徒に「先生」と言われ、頼られたところが嬉しかった
○生徒が先生として接してくれたこと
○授業をさせていただいて、生徒からの反省が返ってきたとき
○先生や生徒が温かく接してくれたとき
○生徒が気さくに話しかけてくれたこと
○生徒が「自分もどんなに難しい夢でもあきらめずに取り組んでみる」と言ってくれたこと

授業における生徒の反応、生徒の会話など実習生と生徒とのやり取りの中で喜びが生じている。生徒との係わりを築くのは難しいとしているが、そのなかで、これらのことが生じている。「生徒の反応をみると、将来教職に就きたい気持ちが高まった」など、教職へと向かう力にもなっている。

（6）実習への取り組み状況

実習への取り組み状況についての自己評価を示す。実習の評価観点の項目でよく用いられる項目で自己評価を行った。いずれの項目とも「とても・おおむね取り組んでいる」であり、授業に関わる教材研究・指導法は「とても」の回答を含め高い割合で取り組んでいる。

表－２　実習への取り組み状況

	とても取り組んだ	おおむね取り組んだ	取り組んだ	もう少し取り組めばよかった	取り組めばよかった
学習指導における教材研究	55.2%	32.8%	10.4%	1.5%	0.0%
学習指導における指導方法	52.2%	38.8%	7.5%	1.5%	0.0%
生徒指導における生徒理解	40.3%	37.3%	17.9%	4.5%	0.0%
生徒指導における学級指導	40.3%	43.3%	13.4%	3.0%	0.0%
実習態度における勤務態度	52.2%	38.8%	9.0%	0.0%	0.0%
実習態度における事務能力	46.3%	40.3%	13.4%	0.0%	0.0%

4．教育実習から教職課程の質の向上へ

教職課程における入門的な授業科目に、「教職の意義及び教員の役割・職務内容（チーム学校運営への対応を含む。）」を学ぶ科目がある。この授業科目の教職コアカリキュラム[7]の全体目標に「教職の意義、教員の役割・職務内容等について身に付け」とあり、それぞれの到達目標に「教員の存在意義を理解している。教職の職業的特徴を理解している」「役割や資質能力を理解する。教員に求められる役割を理解している。教員に求められる基礎的な資質能力を理解している」「教員に課せられる服務上・身分上の義務を理解する。校務を含めた教員の職務の全体を理解しているなど」と示されている。この目標は、カリキュラム上の当然の帰結かもしれないが、教育実習における学修や学校現場の教員や生徒の姿からの学びから考えると、教職課程の入門から修了までの一貫した教職課程の中心となる学修内容であり、教職課程において目指す学修の目標となる。このことを考えると、入門的な授業から教育実習まで、教育実習の学修、内容、困難とする点を、学修の中心に置くことにより、より一層明確に目指す学修上の到達点が示されるのではないだろうか。これを教職課程のそれぞれの授業科目において具現化することにより、一貫した教職課程の学びがより体系的に構築できるものと考える。また、下級学年においてインターシップや学校現場の体験などの実施、教育実習の学生の学修内容を生かした指導助言を行うことも教職課程の一貫した学修に有効であろう。実際に教育現場で、子どもと向かい合う教師や生徒の姿は、学生にとって大きな影響をもたらすことになる。このように教育実習の内容・学修を見通したうえで、教職課程全体の学修内容を再検討し、効果的な学修プログラムを構築することも必要であると考える。

5．おわりに

教育実習終了後に学生は、「教員としての仕事のイメージがついた。生徒との係わり方は、自分の性格にあわせた接し方になるのかと思った。先生によって話し方、態度も違う。問題だなと思う先生もいて、それは違うと思った。先生の顔によってわかる。活き活きしている先生を見ると、プラスの感じがする」など、自分で考え学び取っている。

教育実習は期間や日数などの実習体制は、実習校により異なる。学修の内容は、教職コアカリキュラム等に示されている教職について総合的に学ぶものであるが、実際には授業実習が中心となっており、他については参観・参加に留まる教育活動も存在する。実習中に困難と感じる点は、授業に関する内容が多い。「教材研究は、ただ教科書の内容を理解するのではまったく足りません。それが大前提で、生徒に伝えるために、どのような話題（教科書に載っていない豆知識、たとえ話、最近の出来事）を取り入れ、授業の展開を考えるかが大切」と学生は認識している。

実習の効果は、授業展開・実践、教員としての職務を理解するとともに、生徒との人間関係の重要性を知ることが中心となっている。実習は「意義だった・大変有意義だった」と、捉えられている。実習校の指導・内容や教職の理解を評価している。また、教職への志望も「大変高まった・高まった」としており、学生にとって有意義な実習内容である。しかし授業実習に集中しており、他の特別活動など実習内容に広がりが少ないという現実もある。この内容についても実習校の指導により異なるので、実習校におけるコアカリキュラムの理解、指導のスタンダード化などが考えられる。

教育実習で学生は、教師や生徒の姿、教師と生徒の人間関係において、子どもの育ちが生まれることを知り、そのなかで教師として自己意識や教職の喜びを得ている。この実習の体験こそが、教育実習が意義のある内容となる真髄であるのではなかろうか。

この教育実習の学修を、教職の入門的な授業科目から修了まで一貫した教職課程全体の学修に結びつけ活かすことができる。実習の困難、実習の効果から初年時から修了までの各授業科目のカリキュラムマップ上の位置付け、各授業科目の学修すべき内容を体系的に配置、充実することができる。また、教職課程の目指すモデルとしての教師像や教職課程の到達目標の設定、教育課程の改善策の検討などに有効に働く可能性がある。教育実習の内容・効果をもとに、教育実習を見通して、教職課程全体の学修内容を再検討し、効果的な教職課程の学修プログラムを構築することも必要ではないだろうか。

注・引用文献

1）山崎英則、北川明、佐藤隆（2003）「教育実習ガイダンス」東信堂、p.6

2）教育実習を考える会（2000）「新編教育実習の常識　事例にもとづく必須66項目」蒼丘書林、pp.30-34

3）文部科学省「教職課程コアカリキュラム作成の背景と考え方」より

4）平成30年度「授業計画」北海道医療大学看護福祉学部

5）北海道私立大学教職課程研究連絡協議会作成

6）平成24年度～30年度に実施した。教育実習終了後に質問用紙を配付し、報告書等に利用することを明示

して回収を行った。回答数は77件であった。

7）文部科学省「教職課程コアカリキュラム作成の背景と考え方」より

参考文献

北海道私立大学・短期大学教職課程研究連絡協議会編（2010）「教育実習の手引（第6版）」学術図書出版

教育実習を考える会（1995）「実践『教育実習』」蒼丘書林

三島知剛、安立大輔、森敏（2010）「教育実習生の実習前後における学習の継続意志の変容：実習前後の教師効力感の変容・実習の自己評価に着目して」『学習開発学研究』（3）、pp.91-99

溝邊和成、内藤博愛（2007）「最新 教育実習実践マニュアル」明治図書

持留英世、有馬広海（1999）「教師効力に及ぼす教育実習効果」『福岡教育大学紀要』第4分冊 教職科編（48）、pp.303-309

西松秀樹（2008）「教師効力感、教育実習不安、教師志望度に及ぼす教育実習の効果」『キャリア教育研究』第25巻2号、pp.89-96

白石淳（2012）「教育実習における学習効果とその課題 ― 学生に対するアンケートをもとにした一考察 －」『北海道学校教育学会研究紀要』第24号、pp.1-10

山崎英則（2004）「教育実習完全ガイド」ミネルヴァ書房

Study on the effects the problems of teaching practice

Jun SHIRAISHI*

Abstract：

In this report, I examined the significance of the teaching practice by describing the teaching experience of those university students attending a teacher-training course. To write this report, I conducted a questionnaire survey on those students after they completed their teaching practice at high schools.

Through the teaching practice, they are supposed to learn about the school education in a comprehensive manner. However, in reality, they are mainly involved in providing lessons in a practical manner. They are seldom involved in general learning classes, school events or club activities. However, as these activities are forming part of the school' s educational activities, they should be provided with the opportunities for experiencing also those activities in a practical manner.

By doing the teaching practice, those university students are rediscovering the difficulties in providing lessons for school students. Also, through such experience, they are given the chance to understand the fact that school students are being brought up through having a human relationship with their teachers. Drawing on the engagement with those school students, they are experiencing the worth, value and joy specific to the teaching profession. The significance of doing the teaching practice consists in this very experience.

Keywords: Teaching practice, Learning effect, Teacher training course, Teacher qualification ability

* Pepartment of Social Work Practice, Social Welfare Course